

・山桃忌奉賛短歌祭

毎年八月に実施している山桃忌奉賛短歌祭の開催も福崎の短歌風土の醸成におおきく役立っていると思う。柳田國男、井上通泰の業績と遺徳を偲んで町主催による山桃忌を毎年開催しているが、これに奉賛する形で短歌祭を開催してはどうかという意見もあり、記録によると昭和六十一年六月十六日に文学圏の木村真康主宰をはじめ幹部と福崎短歌会の会員数名が、大善寺の棟廣照文宅を訪問し、かねてから棟廣氏が提案されていた「山桃忌奉賛短歌祭」の趣旨説明を聞き、出席者全員が賛同、早急に実行委員会を立ち上げることにし、役場関係等には棟廣氏に依頼することとし、町内の各種団体、近在の短歌会、高等学校、新聞社等に趣意書を送り、協賛、後援を依頼することが決定された。このようにして第一回「山桃忌奉賛短歌祭」が十月十二日に神崎郡歴史民俗資料館にて開催された。出詠歌数は二百二十九首であった。「山桃忌奉賛短歌祭」の主旨からして第二回以降は山桃忌にあわせて開催することとし、場所も柳田國男記念館に移して開催することにした。第二十六回以降文化センターに場所を移し

ている。

選者については、この短歌祭が「文学圏社」と「福崎短歌会」を主体に始められた経緯から第四回までは文学圏社の同人にお願いしていたが、第五回は野瀬昭二（高嶺同人）、第六回は上野晴夫（ポトナム同人）、第七回から第二十三回は川口汐子（をだまき同人）の諸氏にお願いしている。現在は楠田立身氏（兵庫県歌人クラブ顧問、象の会代表）が担当されている。平成二十九年（第三十二回）までとぎれることなく開催されており最近では県外の出詠者も増えているのは喜ばしいことである。最近五年間の応募歌数は二十五年（二十八回）二百九十首、二十六年（二十九回）三百一首、二十七年（三十回）三百七首、二十八年（三十一回）二百八十一首、二十九年（三十二回）二百九十七首である。

・恋と革命の歌人岸上大作

昭和三十年に福崎高校に入学した岸上大作は、短歌グループを指導していた山下静香教諭に出会い短歌にめざめていった。当初抱いていた小説家志望を諦めて、短歌一本で進むことを決意し、大学受験雑誌等に積極的に投稿するようになった。と

同時に早稲田大学の教授である歌人の窪田章一郎の主宰する短歌結社「まひる野」に入会し、同時に福崎の「文学圏」にも入会し、歌会にも出席するようになった。本格的に短歌に打ち込むようになったのは国学院大学に入学し「短歌研究会」の熱気にふれてからである。

また、時代の寵児、寺山修司を意識してか短歌にのめり込んでいった。昭和三十五年は日米安保条約の改定反対運動のまき起こった年であり、中学時代から社会問題に関心の深かった大作は以後、短歌と恋愛と学生運動に興味を集中していった。安保闘争のさなかに「短歌研究」の新人賞に応募した大作の「意志表示」五十首は推薦作となり、四十首が九月号に掲載された。高校時代からの夢が実現したわけであるが、短歌ジャーナリズムに注目され精神的負担もかなりあったものと思われる。それに、少し過度と思われる激しい恋愛への欲求と失恋、安保改定反対運動の挫折等が重なり、彼を自死に追いやったのではないかと思われる。惜しまれてならない。

・井上通泰の歌人としての歩み

井上通泰は他の業績もさることながら歌人として広く世に知られている。幼時から詩文に長じていたものと思われるが、本格的に歌を学んだのは東京に出てからである。播州出身の歌人國富重比古に師事していたが、何年かの空白の後に下宿先の蔵書の中に『桂園一枝』という香川景樹の歌書があり、その中の次の一首（春の野のうかれ心は果てもなくとまれといひし蝶はとまりぬ）が眼にとまり、「これまで見た歌の多くが調想相たぐはざるは歌その物の罪にあらずして作者の咎である」と後に書いているようにこの一首により彼の歌心は開眼し香川景樹門下の松波資之の添削を受けることになった。歌人としての通泰の存在は森嶋外と共に発行した『しらがみ草紙』により世にひろく知られている。しかし香川景樹の詠風に傾倒しつつも、桂園派の枠内にとどまる人ではなかった。その後、通泰の歌学研究は和漢朗詠集から万葉集に至り、その詠風にも万葉研究の余波として万葉的な語法と声調が浸潤して来たといえる。通泰の詠風を考えると、明治三十九年に山縣有朋の内意により設立された「常盤会」の活動は重要であると

思われる。この会において通泰は森鷗外と共に明治時代に相応しい歌調の研究に幾多の業績を残している。明治四十年に御歌所寄人に任ぜられた。その後通泰は歌作りの傍ら、万葉集の講義と研究に精力をついやした。その輝かしい成果が『万葉集新考』八巻である。「万葉集新考」に続いて、「万葉集雑攷」が公刊された。これは新考の八巻の完成される以前から公にしてきた万葉集に関する雑攷をあつめたものである。このように通泰は、万葉集研究のため彼の生涯の大きな部分をささげ倦むことを知らなかった。その心境を歌にもとどめている。

・柳田國男の歌人としての歩み

柳田國男は感受性の鋭い人で幼少時から独学でひたむきな感じの純情な抒情性のある歌を詠んでいるが、本格的に歌を始めたのは上京後兄井上通

泰の勧めで桂園派の歌人松浦菽坪の門に入ってからである。国木田独歩や田山花袋などと共に題詠で恋の歌などを盛んに詠んでいる。この時期は國男が作歌に最も精励したときで、主な作品発表の場合は、森鷗外や兄通泰の発行する「しがらみ草紙」であった。高等学校入学以降は和歌よりも新体詩に熱中するようになっていった。古今集以来の題詠という方法から、実感、実情を詠むということから自然に新体詩に関心が移っていったものと思われる。その後大学を卒業して農商務省にはいり経世済民の実学志向に目覚めるにつれ逆に新体詩への関心が薄れていった。これは若き行政官として行政の実態を見るうちに文学によらぬ新しい表現意欲の高まりを感じたにちがいない。

『遠野物語』や『後狩詞記』の刊行は恋の詩人松岡國男から民族学者柳田國男への転生といえるかも知れない。しかしながら、新体詩は捨てたが和歌はついに捨てきれなかった。むしろ、和歌を愛し、和歌への思いが深きが故に当世風の歌を詠むのを潔しとしなかったのかも知れない。和歌は紙に書いて人に見せるより、花鳥風月を詠いあげて座中の人々と共に楽しむものという

松浦菽坪の説、即ち桂園派の主張が終生、柳田國男の短歌観の根底にあったものと思われる。そのような意味で柳田國男は旧派のすたれゆくご時世に立ち会ったひとりかも知れない。

「うぶすなの森のやまも高麗犬は懐しきかなもの言はねども」
うぶすなの森のやまもものように歌は幼いころから身に備えた歌口によって柳田國男の体内に生きつづけたものと思われる。國男の歌数については、未見の日記やノートに書き添えたものを拾うと増えるかも知れないが三百余首が明らかになっている。(幼少時代の『竹馬余事』の歌を外して)



福崎町文化功績賞 表彰

3月4日、平成29年度文化功績賞、柳田國男ふるさと賞、吉識雅夫科学賞、スポーツ功績賞の表彰式を行いました。受賞されたみなさんは、次のとおりです。

氏名	所属	受賞分野
赤松 紗奈	福崎東中学校3年	「社会を明るくする運動」の作文
木畑 歩	福崎東中学校3年	税についての作文
松岡 莉緒	福崎東中学校2年	「少年の主張」の作文
羽室 京太郎	福崎西中学校3年	美術作品(絵画)
牛尾 優那	福崎西中学校2年	標語(緑化作品)
宮田 理久	福崎小学校5年	読書感想文